

福岡県における近郊やさいの産地形成と経営構造(第2報)

上原三郎・中島健吾

(福岡県立農業試験場)

UEHARA, S., NAKASHIMA, K.

(II) Studies on the development and mechanism of vegetable growing Farm in Suburb-Areas in Fukuoka Prefecture.

1. 調査研究のねらいと方法 第1報に続くものであるが、本年度は福岡市元岡, 和臼, 三井郡大刀洗町大堰地区の3地区で経営調査を実施した。調査方法は前年度に同じ。

2. 調査結果とその検討 3地区の農業構造とくにやさい生産の諸条件を検討し、経営事例調査の結果から3地区のやさい農家の経営構造を検討したい。

(1) 3地区の農業構造、とくにやさい産地形成の諸条件 福岡市元岡地区は福岡市の西部(旧糸島郡)にあり、地区の南部は水田地帯で北部は丘陵がありみかん、ぶどうの栽培が行われる。水田地帯は砂質の排水のよい水田で古くから水田やさい(夏は西瓜、冬は葉菜類)の栽培が行われてきたが、10年前からいちごの栽培が伸びてきた。44年秋からいちごのハウスを転換して、軟弱やさい(しゅんぎく、ミツバ等)の栽培を一部の農家(15名)が始め、将来軟弱やさいの産地として伸びようとしている。

和臼地区は福岡市の北部、海の中道のつけ根に位置し、玄海灘と博多湾に面して冬季温暖で、海岸砂地や塩田跡の畑に露地やさい(早掘甘藷、早掘馬鈴薯、早生玉葱、白葱その他)いちご、ハウスきゅうり等の栽培が盛んである。この地区はかつては甘しよで有名であったが、近郊やさい産地としても歴史は古い。

大堰地区は筑後川中流右岸の純農村で水田は壤土の深い耕土で排水良好な田がやさい作に利用され、河川敷の畑(60ha)にも山芋、ごぼう、里芋、人参、ねぎ等が作られて古くからの産地である。冬季も温暖で、肥沃な土壤に恵まれているため、経営面積が零細化したのであろう、1戸平均81aで、上層農でも150a程度である。10年位前から、ほうれんそう、ねぎ、しゅんぎく、その他葉菜類の作付面積が増加してきた。これは北九州市、福岡市の旧近郊産地のや

さい生産が減退したため、生産立地がこゝに移動してきたといえよう。県下の全青果市場に入荷するほうれんそう 7,874t(44年度)のうち約 2,000tが三井郡からの出荷であり、福岡市地区では三井郡のシェアは63%にも達する。近郊軟弱やさいの産地によくみられるように、この地区は今日も依然として個人出荷で福岡市、北九州市はもとより、筑豊、久留米、大牟田から大分県日田、佐賀県武雄までも出荷している。

第1表 調査地区の概況

調査地区	農家戸数	専業農家	兼業農家		専業農家率 %	やさい作農家数 戸	経営耕地				専業農家規模 ha	やさい面作付積 ha
			第一種	第二種			田	畑	樹園地	計		
元岡	502	186	172	144	36	120	510	52	69	632	1.3	87
和臼	366	42	43	281	12	50	118	98	9	225	1.7	91
大堰	498	180	201	117	36	200	345	60	-	405	1.0	190

(2) やさい農家の経営構造 3地区のやさい農家15戸の経営概況とやさいの生産状況を第2表によって検討しよう。調査農家は地区でも上位の農家であり、大まかには地区の代表的やさい作経営と見てよい。第2表はあえて個別差を無視して平均値で示した。地区の農家の実際はこの数値よりいくぶん低いところにあると考えられる。

3地区の調査農家の経営成果の平均値を比較すると自然条件、耕地条件、やさいの作目や作型の相違があるにもかかわらず、3地区の1戸平均の農業所得や1日当り所得は大差がない。やさい部門所得は、元岡が低く 674千円、和臼 997千円、大堰 1,154千円で、大堰が最も高い。元岡はいちごが主であり、軟

弱物のハウス栽培を始めたのは44年秋で第1年目でまだ十分な成果をあげ得なかったためである。和臼は経営面積が広く、10a当り収益は少なくとも労力を要しない作目を多く作付けすることで収入を上げ、大堰は経営面積が小さいため、狭い土地を集約的に利用し、また労働配分を均一にするため、労働集約度の高い作目とや、粗放な作目とを組合わせて栽培している。この地区の農家が取入れているやさいの種類が多いのは、田と畑の使い分け、さらに田でも排水のよい田とよくない田の使い分けをしていること、個人出荷で小市場を相手にすることなどの要因と相俟って、労働配分を平均化し、年間を通じて150～200日のやさい出荷を行うことに対応するものであろう。

第3表には主要やさいの栽培、収穫、荷造、出荷に要する時間調査の結果を示した。

元岡のいちご栽培は促成(ハウス)、半促成(トンネル)を組合わせて労働ピークを崩し、栽培面積を

30aまで上げた。しゅんぎくのハウス栽培は年間5作を目標とし、現在6棟(240坪)を10棟に拡大し、しゅんぎくのほかミツバ、パセリ、ほうれんそう等の高度多毛作を行い、年間やさい部門所得150万円を目指している。

和臼の早出馬鈴薯は塩浜の塩田跡地10haに作られ、5月10日～6月10日の間に出荷する。5月下旬が最盛期で、この10日間に大部分を出荷する。農協共同出荷である。三苫部落ではいちご、甘藷のほか、最近レタス、アスパラガスなどを試作的に栽培する農家が出てきている。和臼地区でのいちごの栽培規模は最高48a、早掘馬鈴薯のそれは55aである。

大堰のほうれんそうの栽培規模は最高47a(粗収入372千円)で、5戸平均では35a(254千円)である。このような規模の作付が可能の一つの理由は鎌で根元を切って収穫し、わらでく、り、水洗いするという収穫、荷造りの能率化にある。この地区の問題は個人出荷体制をどのように共同化するかにある。

第2表 調査農家の経営構造と経営成果(1戸平均)

地区	調査戸数	農労働専従力	年間専従農日数	経営耕地面積				や延さい積(A)	全延作物積(B)	土(A)地(B)利用度%	やさい粗収入	農粗収入	やさい粗割合	やさい粗収入/a	経営耕地/a	やさい粗収入/a	農経さい営費	やさい部門得	農業所得	一日業当所得
				田	畑	樹園地	計													
元岡	5	3人(2.5)	772	173	8	12(2戸のみ)	193	34	220	114	893	2,003	44.5	271	91	214	515	674	1,488	1,927
和臼	4	4(3.1)	802	87	66	50(1戸のみ)	203	147	278	137	1,461	2,283	64.0	99	81	466	618	997	1,665	2,076
大堰	5	2.5(2.2)	749	82	20	—	102	137	216	220	1,648	2,219	74.3	124	217	494	666	1,154	1,553	2,073

※所得率を70%として概算した

第3表 主要やさいの栽培出荷所要時間(10a当りおよびハウス330㎡当り)

作目	栽培期間	出荷時期	栽培に要する時間	出荷に要する時間	合計
いちご(半促成) (元岡)	10, 下～6, 上	4, 中～6, 上	親床66時間, 移植床122時間 本圃473時間 計661時間	収穫300時間 荷造り, 出荷120時間 計420時間	1,071時間
〃(促成) (和臼)	9, 中～4, 下	12, 下～4, 下	親床160, 移植床206 本圃674 計1,040	収穫350 荷造り・出荷150 計500	1,540
ほうれんそう (大堰)	10, 上中～3, 下	12, 中～3, 下	播種作業20, 管理作業6 } 26	収穫30, 荷造り240, 出荷38 } 計308	334
葉ねぎ (大堰)	5, 中～10, 上	7, 上～8, 上 8, 中～10, 上 中大ねぎ	播種作業46, 管理作業193 } 239	収穫187, 荷造り910, 出荷140 } 計1,237	1,476
ハウス春菊 330㎡1作当り	11, 中～8, 中 5回播種	12, 下～8, 中 ずらして出荷	播種作業23, 管理作業25 } 48	収穫45, 荷造り45, 出荷22 } 計112	160